

合同研究会開催報告

情報システム学会基礎情報学研究会 ネオ・サイバネティクス研究会

2022年8月7日、情報システム学会基礎情報学研究会およびネオ・サイバネティクス研究会 (<https://digital-narcis.org/>) は合同で、連続研究会「情報と創造性」の第10回「生命とコミュニケーションについての創造的再考：ネオ・サイバネティクスを応用した芸術実践の試み」をオンライン・ミーティングとして開催した。

連続研究会「情報と創造性」第10回

「生命とコミュニケーションについての創造的再考：ネオ・サイバネティクスを応用した芸術実践の試み」

日時：2022年8月7日（日）13時00分～14時45分

於：オンライン・ミーティング（Zoom Meetings を使用）

発表者：西田 騎夕（メディアアーティスト）

参加者：28名

研究会の要旨：

本研究会は、連続テーマである「情報と創造性」をめぐって重ねてきた議論を踏まえ、その核となる基礎情報学／ネオ・サイバネティクスの理論・モデルを応用した具体的なメディアアート作品の創作・制作実践について、アーティスト自身による作品紹介・自己考察を起点に、理論的な観点をはじめ幅広い視点からの検討を試みたものである。

まず発表者から、その作品「chain of responses」(2022) <https://kiyu.untamable.work/chain-of-responses/> について、実際の展示風景の映像を用いて、またその実装システム構成なども詳しく紹介された。さらに、当作品における人間と植物のような、異なる生命の間の（機械システム／技術を介した）コミュニケーションをテーマとした先行作品についての分析・考察を踏まえて、当作品に込められたコンセプトと、その基礎情報学／ネオ・サイバネティクスとの理論的な関係性が明示された。

そのコンセプトおよび理論的な応用のポイントは、そうした"人間(生命)=機械"複合系を基礎情報学における階層的自律コミュニケーションシステム（HACS）の理論モデルによって捉えた上で、その新たな可能性として『続 基礎情報学』（西垣通, 2008）などにおいて提唱されてきた「タイプⅢアプリケーション／コンピュータ」という概念の具現化を試みた点である。

当日は上記のような発表を踏まえて、基礎情報学／ネオ・サイバネティクスの理論・モデルとの関係性の詳細について、またメディアアートの制作実践と基礎情報学をはじめとした情報学の取り組みとの相互交流・照応関係のこれまでを振り返りながら当作品の位置付け・意義について、さらには今後の展望まで、多岐にわたる濃密な質疑応答・ディスカッションが展開された。

なお、今回の発表者はかねてから当作品に至る取り組み・実践を進めていたところ、過去の本研究会への参加が切っ掛けとなり、ネオ・サイバネティクス研究会のメンバーとの交流が生まれて、今回の企

画・発表登壇に至ったものである。今後も本連続研究会を中心に、母体となっている科学研究費助成事業全体を通したテーマ「情報と創造性」についての学際的な議論の場を開き、様々な交流や展開が生まれるよう取り組んで行きたい。

本研究会についても、基礎情報学研究会を通して、情報システム学会より多大なるお力を頂き、また学会員の方々から多くのご参加を頂いたことに、改めて深謝を申し上げる。

棕本 輔（司会, ネオ・サイバネティクス研究会） 記

※なお、本連続研究会は、科学研究費助成事業（研究課題/領域番号：20K12553、研究種目：基盤研究(C)、研究期間：2020～2022年度）による共同研究「機械と人間との感性および創造性の異同をめぐるネオ・サイバネティクスの研究」の一環として、情報システム学会基礎情報学研究会およびネオ・サイバネティクス研究会の合同で開催された。